

## 2024年10月27日 説教「罪人をあわれんで下さい」

ルカの福音書 18章 9～14節

使徒の働きの学びを終え、しばらく福音書から学んでいきたいと思えます。今朝の聖書箇所は昨年8月にも学んでいますが、再度開きます。

### 1. キリストのたとえ話 (9～10節)

①義人だと自任する人に (9) **「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。」**

ここで、イエス・キリストは、自分を義人だと自任する人に対して語られていますが、パリサイ人を意識していると考えられます。15章2節で取税人と食事するイエスを批判していることからわかります。イエスは言うのです。自分を義人だと自任している人が概して、他人と比較して、自分は優れているとし、他の人々を見下しているのです。しかし、そもそも「義人はいない。ひとりもない」(ローマ 3:10)とあるように、自らを義人だとすること自体に問題があります。そのような人々に、イエスはたとえ話をされました。

②ふたりの人が宮に (10) **「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとり はパリサイ人で、もうひとは取税人であった。」**

このたとえ話では、二人の人が比べられています。その二人ともに宮に上っていったという設定です。それは、祈るためにです。その二人とはパリサイ人と取税人です。パリサイ人とは、ユダヤ教のパリサイ派に属する人達です。彼らは厳格な律法主義で、律法の書を預言書をも用いながら解釈しました。また、律法を忠実に守ろうとしました。取税人は、ローマ帝国の税金を取りたてる徴税請負人で集金に当たる下級税吏でした。ローマ帝国は直接に徴収せず、徴税請負人に仕事を任せました。任された者たちは、相当の利幅をとって、私腹を肥やしていました。取税人だった人の中には、イエスの弟子となったレビ(マタイ)や、エリコに住み、キリストに出会い、救われたザアカイがいます。彼らは異邦人との接触が多いこともあり、厳格なユダヤ人たちからは、汚れた者たちと見下されていました。

### 2. パリサイ人の独白 (11～12節)

①自信に満ちた祈り (11) **「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正をする者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようでないことを、感謝します。』」**

さて、このたとえ話において、まずパリサイ人が心の中で祈ったとあります。祈りは、神に向かって賛美をし、自分の罪を悔い改め、主の恵みを感謝することにはじまります。しかし、このパリサイ人は取税人との比較をして優越であることを独白しています。また、自分が人をゆるすたり、不正をしたり、姦淫したりしない者であるという自信を示しています。さらに、「ことにこの取税人のようでないことを感謝しています。彼の人間観とはどんなものなのでしょう。自分の罪というものを、浅く考えている事を露呈しています。神の前に、自分がいかに罪深い者であるかを視点がありません。神の前に真摯に

出るときに、取税人を見下すのではなく、自分も同じ罪人である事を認めることが信仰者でありましょう。

②断食と献金 (12) 『私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

さらに、パリサイ人は自らの信仰実践を誇っています。第一に週に二度の断食を守っていると述べます。断食はキリスト御自身が宣教に入る前に、40日間なされたから用いられます。一定期間を、神の前に出て罪の悔い改めをしながら恵みをいただくことを目的としますが、彼はその本質から離れていたのではないのでしょうか。第二に自分の収入の十分の一をささげることも(マラキ3:10)、信仰実践として大事なことでした。しかし、ここに出てくるパリサイ人は、その心のなかにおいて、それらを誇っていることが露わなのです。そもそもこれは祈りでしょか。

3. 取税人の祈り (13~14節)

①自分の胸をたたき (13) 『ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』』

イエス・キリストのたとえは続きます。パリサイ人とは対照的な取税人です。彼は宮から遠く離れて立つことしかできませんでした。そして、目を天に向けることもできず、おどおどするばかりでした。そして、自分の胸をたたいて、絞り出すようにして祈ったというのです。その内容は、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と自らの罪を率直に認めた上で、ただ憐みが与えられるようにと願い求めたというのです。

②義と認められた人 (14) 『あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』

このたとえ話にはパリサイ人と取税人が出てきました。人間的な目で見れば、パリサイ人は立派です。本人も取税人と比べれば、段違いに優れていると自負しています。ですから、彼は自分こそ神から選ばれて義と認められると自信をもっていました。ところが、このたとえ話における、二人の信仰を見ながら、イエス・キリストは、取税人が義と認められ(救われ)家に帰った、と言われるのです。その理由としては、「自分を高くする者は低くされ、自分を低くするものは高くされるからです」とされています。ここでは、パリサイ人が自分を高くする人で、取税人が自分を低くする人であることは間違いないところです。自分を高く評価したパリサイ人は、神によっては評価されず、自分を低く評価した取税人は、神によって高く評価されたのです。

《結論》

今朝の聖書箇所から、第一にイエス・キリストが、このたとえ話を通して教えておられないことについて考えます。それは、パリサイ人が律法を守ることに於いて厳格であった結果、陥った誤りのゆえに、律法を実行することは間違いであると短絡することです。イエスはそのようなことはここで教えておられません。

旧約聖書にある律法は、今日でも有効です。例えば、週報の裏ページにも記しましたが、十戒にある「殺してはならない」という戒めが守られるべきであることは、誰しも認めるでしょう。ただ、主イエスは律法の中にある戒めをさらに深くとらえ、殺してはならないという戒めの根っこに、人間の憎しみや、悪意などがあることを主は指摘されています。また、律法はキリスト信仰を通してこそ、全うされることになるのです。聖霊がその人のうちに働いて、律法を正しく受け止め、結果としてそれを行うことを得させてくださるのです。

第二に、このたとえ話のなかで、パリサイ人は律法を外見的には行っていたのに、どうして義と認められなかったのでしょうか。それは、「自分を高くした」からです。パリサイ人が「神よ。私はほかの人々のように」と言って、本来は神の前になされるべき信仰の実践を、人間との比較にしまい、自分を優れた信仰者だと誇っています。さらに彼は、「ことにこの取税人のようでないことを感謝します。」と言っていますが、取税人を見下したうえで、自分が神のみ旨にかなった者であることを感謝するとしています。ここにパリサイ人の高慢があります。現在、祈禱会ではコリント人への手紙第一を読んでいます。ちょうど先週には4章6節で、高慢の危険が語られています。そこからピリピ2章の謙遜について学びました。コリント書では、8章2節で「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。」とあります。愛に基づかない律法知識や実践は高ぶりを生み出すのです。パリサイ人は律法を外見では行っていました。しかし、他の人との比較に心が傾き、他より勝っているという自負心を先立てました。彼は自分を高くする人でした。高慢な心が、彼を支配していたのです。その結果、神を崇めることを忘れ、自己宣伝に走ってしまったのです。

第三に、取税人はどうして義と認められたのでしょうか。キリストは取税人の罪を容認したわけではありません。彼は確かに、あのザアカイのように、不当な税金の取り立てをして私腹を肥やしていたでしょう。自他共に認める罪人でした。しかし、彼はその罪を心から認めました。宮に上って神の御前に入る時になって、自分の罪が心に迫ってきて、御座に近寄ることができませんでした。目を天に向けることもできませんでした。大切なことは、この時に彼は他人のことなど考えていないことでした。他の人と比べる余裕もありませんでした。ただ、神の前に自分の罪を意識したのです。神を侮り、平気で不正を働いてきたことを心に覚えて、胸がつまってくるような気がしました。そして、もはや自分ではどうにもならず、胸をたたいて、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と祈ったのです。ここに彼の真実な祈りがあります。神さまは、この祈りを受け入れてくださいました。彼は「自分を低くした人」でした。神の前にへりくだった彼が義と認められたのです。神によって高くされたのです。

「キリエ・エレーソン」という言葉を聞いたことがあるかもしれません。「主よ。憐れんでください」という意味のギリシャ語です。讃美歌21では30~35番まで、キリエ・エレーソンを歌詞としての賛美です。私達も主の前に「主よ、憐れんで下さい」と祈りましょう。このたとえ話の取税人と共に、「罪人の私を憐れんで下さい」と祈っていきましょう。主は真実の祈りを受け入れて下さいます。